

9月18日(火)発売『新潮45』2012・10



震災から1年半 福島第一原発・吉田所長が伝えたかったこと

どんなメディアの取材にも応じなかった吉田氏が、初めてビデオ・インタビューに応じた。体当たりで実現させた仕掛人が、全ての経緯と会見内容を明かす。

日頃は京都を拠点に、企業や自治体のコンサルタントとして全国を飛び回っています。3.11のあの時は東京の町田にいました。いままで体験したことのない激しく長い横揺れのなかで考えていたのは、「これは相当な被害が出る。自分がお役に立てるとすれば何だろうか」ということでした。阪神淡路大震災の時にはすぐボランティアセンターを立ち上げて、2ヵ月間やらせてもらった経験があります。しかし今やそういう活動はかなり組織化されていますから、たくさんの方が集まるはず。今度は自分はなにをすべきか。自分が1人で身体を入れさせてもらおうとすれば、それはどこだろうか。そうこうしているうちに、福島第一原発で爆発が起きた。

枝野さんや菅さんの会見を見ながら、ピンと来ました。これは現場の声がまったく届いていない。現場は命がけて必死に闘っているはず。しかしこの官邸や原子力委員会や東電本店の対応は何だ。誰かが現場の人たちのメンタルを支えなければならない。現場を取り仕切る吉田昌郎所長に会って感謝の気持ちを伝え、励まし、支える。それが自分の仕事じゃないか。根拠のない自信と言われればそのとおり。「変な奴」と思われるのは承知の上ですが、自分のなかの思いは確信に近いものでした。それからはもう一目散です。とにかく自分が使えるかぎりの伝手を辿って、福島第一原発に入り、吉田所長に会う。それを目標に行動を起こしました。

まず勇気を振り絞って電話をしたのが、当時財務大臣だった野田さんです。野田さんとは15年ほど前から親交があり、最も頼りにできる政治家でした。財務大臣という畑違いの立場ではあっても、何か力になってもらえるのではないかと。「先輩、私を福島第一原発の免震重要棟に入れてください」。意図は説明しましたが、いきなりのごとで分かってもらえなかったようで、「うーん、藪ちゃん、秩序があるからそれは無理だ。次に考えたのが某商社。新聞記事でそこがJヴィレッジに食料や備品を届けているという記述を見つけて、以前仕事をしたことのある子会社の社長に掛け合ってみました。「トラックの荷台に載せて運んでもらうだけでいいんです」「気持ちは分かるけど、無理」。社長からは重機を入れている建設会社も紹介してもらいましたが、これもダメ。あっという間に3月が過ぎて、レベル7の実態が少しずつ明らかになっていく。こちらは焦るばかりです。何かルートはないかと思案しているうちに、以前に選挙を手伝った地方政治家が東電出身だったことを思い出した。

そうだ、周辺じゃなくて東電内部ゲートを探そう。「最初で最後のお願いだ。誰か吉田所長に近い人を紹介して下さい」と頼み込みました。その方の尽力で、7月に入ってようやく元幹部の方と会えることになった。「免震重要棟ねえ。自衛隊の産業医も入っているし、事故調も入っているから……」。要するに「間に合っているから帰ってくれ」ということですね。それはそうでしょう。こんなどこの馬の骨とも分からないから奴が来たわけだから。でも私は私利私欲ではないことと、自分の聞き方の技術、メンタルケアの技術については自信がありました。実演を交えながら、こちらの真意をお伝えすると、「確かにあなたのような人が必要かもしれない」と理解してもらえた。ただ、この方は吉田所長とそれほど近くなかったため、より近い方を紹介してもらい、また同じようなやりとりがあって、ようやく「吉田に会わせます。いや、会わせたい」という言葉をもらうことができた。

それが去年の8月のことです。「吉田が会うといっています。Jヴィレッジでお待ちしています」というメールを頂戴したのは9月に入ってから。しかも「3時間会います。夜はJヴィレッジに御宿泊を」。これには驚きました。

9月18日(火)発売『新潮45』2012・10

震災から1年半  
福島第一原発の真実!  
吉田所長が伝えたかったこと!!  
「一緒に死んでくれ!」  
藪原は、なぜ免震重要棟へ入れたのか!!  
全ての経緯と会見内容を明かす!!  
『新潮45』10月号発売中!!

2012  
10



「一緒に死んでくれ」

10月初旬の面会当日。いわき市まで迎えが来て、Jヴィレッジに向かいました。運転する職員の警戒ぶりがひしひしと伝わってきます。私はかねてから思っていたことを聞きました。「吉田所長には側近がいらっしゃるんですか」。事故から半年あまり。吉田所長のメンタルがこれだけ安定しているのは、よい側近がいるからに違いない。案の定、1名の名前が挙がりました。3号機爆発直後に、吉田さんが呼び寄せた方だそうです。少し打ち解けたところで、吉田所長はどんな存在か聞いてみました。

「精神の支柱です」

あの方でなければこの状態に持って来れていない。吉田所長だったから、なんとか食い止めて、我々も頑張ることができた。その言葉に私は感動しました。

Jヴィレッジは協力企業の寝泊まりに使われていましたが、私たちの面会のために部屋が用意されていました。まもなく吉田さんもお見えになった。「1人立ち会ってもいいですか?」と紹介されたのが、車の中で名前の挙がった側近の方でした。私としては、自分は何者か、何のために来たか、まずは口上を述べねばと思っていたのですが、その必要はまったくなかった。吉田所長の話が始まり、口を挟むまもなく30分ほど続いたのです。吉田所長が繰り返し仰っていたのは、とにかくもっと現場の声を聞いてもらいたい、ということでした。メディアは正確に伝えていない。しかし、特定のメディアだけ自分が語るわけにはいかない。

そのもどかしさのようなものが伝わってきました。それと、「同僚たちが凄かった自分は何もしていない」ということも強調されていました。

やっと一息ついたところで、「私にもそろそろ話をさせて下さい」と断って、まずは現場の方々のご苦労に心から感謝しているということ、国民を代表して御礼を申し上げたいと言いました。それで私の仕事は半分済んだようなものです。側近の方にも、よく支えて下さいましたと申し上げました。吉田さんはその方に「一緒に死んでくれ」と電話したのだそうです。すぐにヘリコプターで向かったけれども、線量が高くて最初はUターンせざるを得なかったとも聞きました。

最初の1週間は本当に地獄だったそうです。そういう極限状態の中で、各号機の間を何度も往復した部下たちがいた。

吉田さんは「地獄で菩薩を見たような思い」と表現しました。吉田さんは曾祖父が仏教に縁があり、若い頃は「坊主になりたかった」ほどで、仏教に造詣が深い。

官邸及び本店の対応の遅れには、「もっとできることがあった」と悔しそうでした。吉田所長は徹底して現場サイドの人です。生きるか死ぬかに直面した南極観測隊の隊長のようなリーダーシップを感じました。「逃げ出そうとは思わなかったんですか」と敢えて聞いてみました。「うん、一度も思わなかったですね」とさらりと即答されたのが印象的です。

面会の最後に、免震重要棟に入れて下さいと切り出しました。私も自由になる時間は月に2日くらいしかないが、その2日を使って現場の方々のお役に立ちたい。

メンタルケアのボランティアとして入れてもらえないか、とお願いしました。しばらく考えた後で、自分の責任でとOKをいただきました。残念ながら11月末の初訪問の直前に病気で退任となり、免震棟での再会はかなわなかったのですが、高橋毅新所長にも引き継いで下さり、毎月1回通っています。言うまでもなく、金銭的關係は一切ありません。

現場所員から聞いた話は表に出さないという約束なので、個別のことは話せないのですが、現場で踏ん張っている人たちが、とても気の毒な状況に置かれている。

東京電力のマークの入った洗濯物は外に干せない。自ら被災しているケースも多いのですが、家族が避難所で白い目で見られる。一時帰宅の際に、家族に迷惑がかかるからと、家に上らず車の中から言葉を交わしたという話もあります。

そういう現実や吉田所長の思いを伝えたい。

そもそも福島第一原発の事故収束なしに、福島の復興も日本の未来もない。

にも関わらず、福島への関心は急速に薄れつつある。なんとかしなければという思いから、去る8月11日に福島でイベントを開き、吉田さんにビデオでしていただいたのです。政府事故調の報告発表までは出さないで欲しいということでこの時期の公開になりました。

9月18日(火)発売『新潮45』2012・10



#### 野田総理との出会い

私の思いはただ1つ、「福島の完全安全宣言」を1日も早く出せるようにすることです。そのために所員の方々のメンタルケアとモチベーション維持のお役に立てればということで、通わせていただいている。応援団のようなものですね。

また、福島の地に世界の英知を結集させたいと強く願っています。吉田所長もそこに賛同して下さったのだと思います。私が福島第一原発に出入りすること、野田総理と親しいことを結びつけて、何やら詮索するような記事が出たりもしましたが、以上のような経緯ですので、

それは全くの誤解です。

野田総理にご迷惑がかかるのは本意ではない。

実は私は政治家を志した時期もあって、いろんな方の選挙のお手伝いもしました。15年ほど前の佐賀県多久市長選で出会ったのが、浪人中の野田さんだったのです。

それまでは自分が優れた政治家になり、世の中のためにと思っていましたが、野田さんと出会って考えが変わった。こういう優れた人がやって下されば、自分がやる必要はない。自分はこの人を応援する側に回ろう。そして自分は非政治の分野で世の中のために頑張ろう、そんなふうにとんと腑に落ちたんですね。それから野田さんの選挙も、2002年の民主党代表選も必死にお手伝いしました。

コンサルタント活動はほぼそれ以降のことです。

政治家志望として動くなかで、組織に活力を与える役割を期待されることが多かった。

自分はその部分でお役に立てるのではと思い、勉強してみると、どうやら我流でやっていることが、コーチングやメンタルケア、人材マネージメントと呼ばれるものであることがわかった。語り手が聞き手と話しながら自ら「答え」を見つけ出していく考え方や技術。それを「わもん(話聞)」と名付けて実践してるところです。

私のやり方は「徹底して聞く」ということ。これは誰でも磨くことができます。

ラジオ体操のように身近な修練によって「聞く力」を身につけることができれば、職場も社会も1人1人の人生も変わる。

「聞き方の革命」を起こしたい。

そういう自分の実践を続けながら、福島完全安全宣言のために、具体的にお役に立ちたいのです。例えば汚染土の処理をめぐっても地元の足並みが揃わない。

双葉郡八町村の首長をつなぐ役割をやらせてもらえるなら、やり遂げる自信はあります。もう1つ、2020年東京オリンピックを招致する際、予選などの開催地にぜひ福島を入れて欲しい。今度は猪瀬副知事になんとかお目にかかって、アイデアを聞いていただきたいですね。